
W

浜村朝子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W

【Nコード】

N9105D

【作者名】

浜村朝子

【あらすじ】

Wというのは心の中に自分が二人いるという事を示しながらある一人の女性が、差別・犯罪・自殺・虐めで苦しむ人間を助けようと日本全体の人間を過去に送り込むが…!!?

「……………」
「…ちゃん…こうむちゃん…どうしたの…?」
「何が…?」
「元気ないよ…こうむちゃん…」
「別に…」
「ならいいけど…」
「おーいこうむー! 荒木さん…遅れるぜ!」
「今行く…」
「…仲いいな! おまえらって付き合ってたのか?」
「い…いえ私達はそんなんじゃない…」
「ただの幼なじみだよ」
「ふーん…じゃさ…荒木さん俺ら付き合わん?」
「え…?」
「下の名前って何教えて」「ひ…ひみ…です…でも…でもどうして私
なのですか…?」
「なんでって単純に可愛いなーってさ…」
「え…私が…?」
「おかと…ひみ遅れる」
「あ…うん…じゃ行こうかひみちゃん!」
「あ…はい!」
「ひみちゃん! 敬語じゃなくていいよ!」
キンコーン
「あ…やべー! 急ぐぜ!」
「うん…」
「こうむの奴おいて行きやがったな!」
「コラー遅れるな! 沢村荒木!」
「ごめんなさい!」「まあいいとするが今度から気をくばれよ!」

「はい！」

「ホームルームを始めるとする！」

「……」

「さくわくむくらく！おめえ荒木ひみさんとは、どっいっ仲だく？」

「へ？」

「二人で朝入って来てたよな…抜け駆けしただろっ？」

「あ…えーと…その…」

ガタン！！

「付き合い始めたって言えば…？」

「こ…こつむ…へ…へんな事言っなよ…」

「何ー！！付き合ってるだと…おかとー」

「わーやめろって…」

「アホくさ…」

「ああー！！」

「うざっつてい…あの女の何処がいいというんだ？俺には分からないね…」

「んだと…こつむ！おまえは小さい時から一緒にいるから分から

ないだろっつがな…ひみちゃんは純粹で可愛い女の子だぜ！！」

「それは…どうかな…」

「…こつむちゃ…ん…」

「ひみちゃん！！今の聞いて…！！！！！！」

「…そ…そうよね…私なんて…」

「荒木さん…」

「じゅめ…んなさいこつむ…君…」バタバタ

「…こつむ…俺は軽蔑するぜ…こんな奴だったなんてな！」

「……」

「行こつぜ…」

「…こんな事思ってないの…に…」

（思っつてんだろっ…？）

「誰だ！！」

(本当はそう思ってたろう…?)
「出てこい…」
「何やっているんだね…もう席につきなさい！」
「…はい…」
(へへ…こうむ…聞こえてんか…?)
(おまえは誰……?)
(おまえだよ…)
「え…?’
「ん?何だ?下松君質問かね?’
「あ…いえ何でもありません…’
「先生こんな奴ほつといて先進もつぜ…’
「何かあつたのかね?沢村君…?’
「時間の無駄だぜ先生」
「嫌…しかし…喧嘩はよくないぞ!おまえ達!’
「へいへい…’
(人間はちつせいよな…こうむそう思わないか?)
「……………」キンコーン
(こうむ…)
「…うるさい…消えろ…おまえがいるからひみにもおかとも…ひみに酷い事言っておかとにあんなふうに言われて…全部…全部!!おま…えがいるから…おまえはいつたい何者だ!!…!なんで俺に…’
(へへ…)
「こうむ!何独り言いつてんの?’
「姉ちゃん…別に…」
「あ!そうだひみちゃんから電話あつたわよ!’
「…ひみ…から…?’
(あの女からか…)
「…ひみ…?’
「こうむちゃん…こうむ君…あ…あの…’
「ひみ…いつも通りの呼び方でいい…’
「…こうむちゃん…’

「…何？」

「あ…嫌別に用事というほどでもないんだけど…ただ声が聞きたかっただけなの…こういうのってめ、迷惑と思うけどそれでも…」

「迷惑なんかじゃないよ…ひみ…ごめんな…今日あんな事言っごめんな…ひみ…ごめん…」

「もう…いいわ…」

「ひみ…実はあれな…嫌何んでもない！！じゃ明日な…」

「うん…こんな時間にごめんね…じゃおやすみなさい…こうむちゃん！」ガチャ（何を言つつもりだったんだ…！こうむ！）

「こうむ！ご飯よ！降りて来なさい！」

「うん…」

（無視するな！こうむ）

「……………」

（チエ…………）

「……………」

「ひみ…おはよう…」

「…あ…おかと君…」

「おす…ひみちゃん！」

「…おかと…」

「ひみちゃん行こうぜ」

「そうね…」

「ひみ…？」（へへ…面白しれ…人間って…）

「おまえ…ひみに何をした…！！！」

（さあーね）

「い…」キンコーン

（チャイムなつたぜ！）

「コラー！10分遅れだぞ！分かってんのか…！」

「…すみません…」

「この頃遅刻する奴が多いぞ…！」

(この先生…本当は子供好きで優しい奴なんだろうがな…)
「…え?…」
「何だ!!何か言いたい事でもあんのか!!…!!」
「い…いえ…ありません」「じゃ席につきなさい…今から数学の時間だ!この問題を大塚あなす言ってみろ!!」
「あなす…あてられてるよ…大丈夫かな?」
「…あ…ええとここ…は…えーと…」
(こいつも頭いい奴なのにな)
「-5…です」
「え…あなすが…!?!」
「大塚よくできたなーあってるぞ!」
「は…はい!!…!!」
「あなす!さっきのどうしてわかったの?」
「わ、私にも…分からないよ…どうして分かったのか…」
(へへ…人間はどうしてこうなるんだろうな…人に言われてそのまま成長して嘘の自分を作っちゃう)
「おまえ…何を知ってる」(さーなんでしょう!わかんねえだろうな…へへ)
「クソ…ふざけるな」
「…下松君…ちよっといい?」
「…何?木村さん…」
「…今日一緒に帰らない…?」
「え…!?!」ざわざわ
「木村さんが…こうむに…んなバカな…」
「下松君…だめ?」
「え…あ…えーと…」(うんって言っとけよ!自分から言えねえのか…それじゃ…)
「ああ!いいぜ!!喜んで…」
「こうむ…マジか?」
「おつ…!」

「うらやましい…なんでこいつが!」
「へへ…うらやましいだろう?」
「ム力つくやるうだな…こつむのやるう!…!」
「木村さんそんなじゃ待っててくれ!」
「ありがとう…じゃあ今日帰りにね!」
「…こつむ…ちゃん…」
「……」(…こつむちゃん…笑ってた…わ…私には見せた事一度だつてないの…に…)
(それじゃ…聞いてみたら?)
「え…?」
「どうしたの?ひみちゃん…」
「い…いえ…なんでもない…わ…」
「そう…しかしあれだよな…こつむの奴!腹たつよな…ひみちゃんの事何も考えてねえんだぜ…あんな事言ったのによ…」
「こつむちゃん…謝ってくれたわ…昨日…」
「え…!? そうなのか?本当か?」
「うん…だからあまりこつむちゃんの事悪く言うのをやめて…おかと君」
「許すのか…?」
「ええ………」
(それは本当の気持ち?) (…誰…?)
(フフ…貴方荒木ひみよ…!)
「何言ってるの…? 貴方…?」
(フフ…)
「…ひみちゃん?大丈夫…?」
「あ…うんごめ…なんでもないわ…私用事思い出したから…ごめんね!」
「あ、うん! じゃバイバイひみちゃん明日な!」
「フ…」(ま、待って何処に…何処に!! 行くの!?)
「フフ…まあ見たら分かるわよ……」

(え…こう…む…ちゃ…んと木村…さん…い、いや見たくない!!)
「あれを見て…許すというのかしら？」

(…許すわ…私は…)
「そう…それがいつまで続くか楽しみだわ…」

(……)

「こうむちゃん…楽しそうだわ…」

「あら荒木さん帰り？」

「……」 バタバタ

「どうしたのかしら？」

「ひみか…」 (ひみ…!! おまえ早く変われ俺と…俺は!!)

(へへ…家についてからだ!)

(クソ…!!!!)

「こうむちゃん…が決めた事だもの…自分で…だから私は…手も口も出しちゃ…いけないんだもの…こうむちゃ…んが自分で決めた事…そんなの…そんなの! 分かってるのに…分かってる…のに…涙が止まらない…止まってくれない!!」 (…悲しいだろう? 苦しいだろう? 死にたいぐらいせつないだろう…それでもあの男をいつまでも許すの?)

「……ええ…」

(そう…じゃあ…せいぜい苦しむといいわ!)

「……」

「ひみ! お電話よ…こうむ君から!」

「…こ…うむちゃ…んから…?」

「ほら早くおりて来なさい!」

「…こ…うむ…ちゃん…」

「ひみ…あ…えーと…」

「木村さんの事なら気にしてないわ…だってあれは、こうむちゃん…が…決めた事だもの…私は何も言わないわ…」 「ち…違っ…!! あれは…!!」

「え?」

(また!!こいつ!!)

「嫌なんでもない!気にするな…じゃ明日な」

「あ…うんおやすみ…こうむちゃん…」ガチャ

(こうむ!!!)

「おまえさえ…いなくなれば…ひみを傷つけずにいられるのに…」

(俺を消したいか?)

「ああ!…俺は!!誰も傷つけない…もう!!」(へへ…そいつあゝ無理だ!俺が消えたらおめえ人間じゃなくなるぜ!!)

「どういう意味だ…!!」(12時だぜ!寝るよ)

「教える!!!!」

「こうむ!!何夜中に騒いでるの!!!!もう寝なさい!!!!」

「分かった…」

(へへ…)

「チツ…」

「…こうむちゃん…なんだかへんだった…なんかあったのかしら…?…ねえ貴方はどう思う?」

(さあね…)

「貴方だつて女の人でしょう?もし貴方のす…好きな人がなんかへんだつた時…心配にならない?」(…何言つてんの?私は、貴方なのよ…もう寝ましょう!)

「……………」

「ちよこ…一緒に帰ろうぜ!」

「うん!いいわよ」

「…こうむちゃん…木村さんの事下の名前で呼んでるの…?」

「フフ…だって私達付き合ってるものね!…こうむ」

「ああ…そうさ!だからひみ邪魔すんなよ!」

「え…?…こうむちゃん…」

「それじゃあそういう事でバイバイだ!」

「…バイ…バイ…私…は…もういらぬ?…こうむ…ちゃん…
…こうむちゃん…こうむちゃん…こうむちゃん…私を…捨て…ない

でお願い……」

「……み……ひみ！起きなさい！遅刻するわよ……！」

「……夢……？」

「ほら！早く」

「あ……うん……今行くわ！」「ひみちゃん！おはよう……！」

「あ……おはよう……おかと君……」

「元気ないよ……なんかあった？？」

「何も無いわ……さ、行きましょう……！」

「……なんかあったら俺じゃ頼りないかもしれないけど……言ってね！」

「うん……ありがとう」

「あ、こうむだ……！」

「え……！」

「ひみおかとおはよう」

「……こうむちゃん……おはよう……！」

「おす……こうむ……」

「……おかと……俺を許す……のか？」

「謝ったんだろ？ひみちゃんに……なら俺は何も言わないよ……よし！遅刻になんぜまた先生に怒られる……！」

「ああ……そうだな」

（本当か？その言葉……本当に許すのか？）

「あ？何か言ったかこうむ？」

「何も言っていないけど」「空耳か？さっきの……！」

「おかと君？」

「嫌……別に……行く……！」

「……」

（八八……）

「……ん？なんだ？」

「……どうしたんだね？沢村……？」

「あ、すみません……ちょっと寝ぼけてました……！」

「おかと君……大丈夫？」

「ああ……」

（おまえはちつとも寝ぼけてねえぜ……！）

（誰……おまえ……は？）

（おまえだよ……八八）

「おまえ何言ってる……？俺ってどういう事だ？」

「……沢村？保健室行くか??」

「あ……いえ……すみませんでした……」

（もしかして……おかとも……俺と……同じ……？おめえなんか知ってる？もしかしてひみ……も）

（へへ……さあね……）

（そうなんだろ！教える……！皆に何したと言っただ……！教える……！）（俺は何もしてねえぜ……へへ……）

（どういう……事だ……！）（へへ……）

「ふざけるな……！」

「こうむちゃん？」

「何か……質問があるかね……下松……！俺の授業に不満でもあるのか……！」

「あ……いえ……すみません」（へへ……）

（クソ……）

「……下松……ご読め……！」

「あ……はい……」パラパラ

「60ページよ……こうむちゃん……」

「あ……うん……ありがとう……心というのは、難しくとてもこわれやすい所でもあります……」キンコーン

「よし！それじゃここまでで終わる……この続きも下松だぞ……！」

「……分かりました……」

「下松君今日もいい？」

「……木村……さん……」

「ちよこって呼んでくれると嬉しいわ……」

「……ごめ……いいぜ……ちよこ……」

「私もこうむって呼んでいい？」

「おう！」

「優しいのね…こうむって…」バン…！

「ひみちゃん…！！！！！」

「あの夢…まさ夢になっちゃったね…私がどんなに…こうむ…ちゃん思ってたも…叶わないんだね…もう…でも別にこうむちゃんが幸せなら私は何も言わないわ…何も…」

（フフ…だから言ったじゃないの…あの男を信じてるせいで貴方の心は汚れてゆくわ…信じるという事は愛する事だものね…）

「そしたら…私はどうしたら…いいの？どうしたらこうむちゃんを…愛する事を…やめられるの…？」

（簡単よ…その体を私にくれたら…）

「え…？」

（さあ…どうする？）

「……………」

「ひみちゃん…！！！！！」

「おかと君…」

「鞆おいていったよ…」

「…ありがと…おかと君…」「大丈夫？ひみちゃん…こうむの事…」

「うん…」

「…本当か？」

「…ええ」

「…とりあえず家までおくるよ…！」

「え…でも…いいの？」

「うん…！」

「……………」

「ひみちゃん…泣きたい時は泣いていいよ…我慢しないで…」

「…うん…ありがと…」

「人に見られるのが嫌なら俺の…俺の…胸の中で…中で泣いてい、

「私のはらつわー!」

「行くぞ……」

「……ごつむ……おまえがそんな奴だったなんて……本当にごつむなのか……」

(もう一度言つわ……あの男を信じてるせいであなたの心は汚れていくわ!さあどうする?)

(……本当にごつむちゃん愛する事やめられるの……この張り裂けそうな思い……貴方……に体あげたらもう……苦しむ事もなくなってくれるの?もう……泣かなくてすむの……?)

(ええそうよ……)

(……あげ……るわ……私はもうごつむちゃんと……木村さん……を……見て……せつなくなる……のは……嫌……)

(フフそれじゃ決まりね……貴方は眠るといいわ……)

「……永遠……にね……」

「ひみちゃん……ここにいたんだね……心配だったよ……ごめんな……俺がお茶をするって言わなかったら……俺あんなセリフ言ったのに」

「おかと君……私気にしてないから……平気よ!ごめんね心配かけて……」

「……我慢はするなよ……ひみちゃん」

「ねえ……おかと君……ひみって呼んで……」

「え……それって……」

「ええ……そうよ!あの二人と同じ事するの……私はおかと呼んでいい?」

「え……いいけど……」

「決まりね!おかと……とりあえず帰りましょう」

「おう!そうだなひみ」

「……」(ふざけやがって!!!!!!ひみにあんな所見られて!そしておかとにあんな言い方して!!!!!!俺をなんだと思つてやがる!!!!!!何回ひみやおかとに……ひみだつて絶対泣いてるかもしれないおかとも怒ってるかもしれない!!!!俺は俺だ!!!!勝手に俺の

「…こんな事って…ないぜ…」

「……」

「松…下松こうむ…!」

「あ…はい…」

「何ボーとしとるんだ!総合の時間だ!昨日言ったところを最初から読め!」

「…はい…」

「……」

(60ページよ…こうむちゃん…)

(…ひみ…)

「心というのは難しくとてもこわれやすい所でもあります。例えば人を思う事ですべてをなげすてたり、自分を見失う事だってあり、何も手につかず人は時おり自ら命を粗末にしまっケースが多ありつりますそれは心に負けたから…自分の心に負けてしまったからです…とても残念ではありません。」

「よしここまででいいぞ!じゃ次は……」(ひみ…ひみ…ひみは小さい時からずっと一緒にいたそれが当たり前だった…俺が友達と喧嘩して負けた時だっつてずっと励ましてくれてずっとついててくれた…それが少しうっとおしかったけど今…になつて分かったひみがいてくれたから俺は頑張つてこれたんだ…なんで俺は…失ってから…気付くんだ…ろう…な…ひみの存在が大切だつて…)

(…人間は失つてから気付く者だからな…)

(……)

(こうむちゃんは、こうむちゃんだよ…他の誰でもない私ね…私こうむちゃんが大好きだよ…誰よりも…おばあちゃんになつてもそれは変わらない…)

「……ひみ……」

(……)

「…ひみ…こうむの事だけどさ…あれでよかったの…?」

「私の事好き?」

「…大好きだよ…可愛いと思ってる…」

「ならいいじゃない…これで！」

「…我慢してない？」

「そんなのしてるわけないわ！…おかともつこの話やめましょう…」

「…ひみ…」

「行きましょう。先生が来るわ！」

「お、おう…」

(……)

(…ひみ…)

(…ダレ…ワタシヲ…ヨブ…ノワ…ダレ…)

「ひみ…？」

「こうむどうしたの…」

「あ…嫌なんでも…ない」(アナタ…ダレ…)

(僕はラビエス…君を迎えに来た…)

(ムカエ…ツテ…ナンノコト…?)

(フ…まあこれを見たまえ…)

(…エ…)

(この二人は結ばれる…この二人を見たくなければ僕と一緒に別世界に行かないか…?君にとってこの男は悪だこのままこの地球にいるより…僕と…)

(コウ…ムチャン)

「ひみ…」

「荒木さんがどうしたの…?こうむ」

「ひみの本当の声が…した…」

「え…？」

「木村さん！…ごめん俺行くから…!!」

(こうむ…私の事木村って…ちよこって呼んでいいのに…なんか変…今日のこうむ…私の事嫌いになったのかしら…?…こんなに美人なのに…こうむは…荒木さんの事ばかり気にしてるみたい…)

「あれー木村さんじゃんどうしたと?もう先生くんぜ…」

「う…うん…あッ！」

「おっと」

「あ…りがと…う…あら？誰も…誰もいない…わ…さっき…までここにいたのに…あれ…？」

「ひみ…！」

「何かよつかしら？フフいいわよ…どうせ今の貴方と話せるのも今日が…」

「…なんて言ったんだ…ひみ…」（始まっちまったか…このWが…へへ…）

「え！？」

「何言ってるのか…わかんねえ…ちゃんと言ってくれ！！」

（ハハ…言ってるんじゃないかよ…さっきから…Wだってな！）

「Wって…Wってなんだよ…！！…！！」

（もう時間だ…ハハ…さようならだ永遠にな！）

「え！？」

「バイビ…！」

カッ…！！…！！…！！…！！

「…行ったわね…日本全体の人々が…時間はかかったけど…仕方ない事だわ…私達は…」「ああ…そうだな…」

（…ココ…ハ…ドコダ…オカトモヒミ…モ…ダレモイナイ…ア
ルノハ…ノハラダケ…ミンナドコ…？…ン？）

「…お兄…ちゃん…お腹すいたよ…」

「…これでも…食べて我慢してや…」

「ドングリ…こんなんじゃ…」

「ライ…分かってくれや…ライももうさやけ…分かつとんやろう…？」

「…うん…」

（キミタチドウシタンダ…？）

「さあ行くこうかライ…」

（アレ…？キコエナイノカ…？オレノコエ…）

(フハハ…今から見えるようにしてやる…おまえはこの人々と同じ暮らしをし…同じ苦しみをあじわうのだ…)

「ナニ!?!…え!!これは…!!」

(そうだ…服装も同じだ…フハハハ!!…!)

「ひ…ひみちゃんは…皆は…?何処?…あ、あれなんか…変…僕どうしたの…?」

(今のおまえは…5才ぐらいなのだ…)

「え?」

(それじゃな…)

シュツ!

「分かんないよ…それじゃ…」トン!

「ね!君見かけない顔だけど…誰?」

「…こつむ…」

「変わった名前だね…僕はライだよ!こつちお兄ちゃん…」

「いくつ?」

「1…嫌…5才です…」

「5才…ライと同じじゃな…ライよかったな友達できたやん…よろしくや…こつむ…」

「…お兄ちゃんの名前は…?」

「ロキって言うんや…」

「ふーん…」

ガラガラ

「おい!こんなところおつたら邪魔だ!!あつちいけ!…!!」

「すみません…」「ふん…女みたいなやろつどもだ…さつさとあつちいけ!…!!」

「…はい」

「何…あの言い方…?ライ…」

「…いつもあんなふうだよ…」

「え…?…なんで…?」

「…僕達はね…こつむ…」(…ここは…どこかしら…あの人も何処

かに行ってしまったわ…それにこの服…あの人は今の私を5才って
言ってたわ…それはいつたい…?」

「あー!!!!!!ここにくんない!!!!!!」

「すみませんすみません…許してください!!!」「誰が許すか
!!モコンの人間が!!皆やれ!」

「い…嫌ややややや!」(な…何…?)

「お姉ちゃん!!!!!!」

「酷い…なんでこんな事…」

「あやちゃんで3人目じゃな…」

「いい子じゃったのに」

「お姉…ちゃん…お姉ちゃん…うわあああああ!!!いつちゃ
やだよお姉ちゃん!!!!!!!!!!!!」

「おかと…?どうしたと…?」

「あ…ごめん…キラ!少し考え事してて…」「ふうん…おかと僕に
出来る事とかあったら言っつてね!」

「ありがとうキラ」

「うん!」

(…どうして…笑えるのだろう…モコンってあれだろう…社会でな
らった…あんな事言われて…俺だったら笑っていられないだろうに
…よほど…強い心なのか…?)

「おかと!皆来てっつてよ…行くっつ!」

「うん…今行くよ!」

「…キラ…」

「ど…どうしたの…皆…泣いてるの…?」

「う…シツク…」

「!?!?」

「ア…アン…が…」

「…う…そ…だ…こんな事ってある…わけ…あるわけない!!!!!!
アンがアンが…何かの…間違いだ!!!!!!アンが殺される理由…なん
て…」

「…キラ」

「嘘だ！……！！！！信じない！！！！！！」バツ！

「キラ！！！！！！待て！！」

「止めるな！！！！僕は…僕は許さねえ！！！！！！！！僕らが何した
つてんだよ！！！！！！！！」

「やめろ！！！！キラ！！！！そんな事したつて…キラが殺される！」

「殺されたつて僕は構わない…アンがいなかったら生きてたつて一
緒だ！！！！！！！！！！」

「キラ………」

「…ほつといて…よ…どうせ…こうなる事は分かつてた…僕達はモ
コン…だから結ばれない事ぐらい…分かつてたんだ！！！！でも…ア
ンが好きだったんだ！！！！だから笑つていようつて…そう思った
んだ！！！！」

「………」

「ちよこー！」

「…何…サト？」

「嫌ちよこつて聞いた事ない名前だからさ…ちよつと呼んでみたつ
てわけ！」（………）

「そう…」

「これから畑だから…行くよ！」

「うん…」

（…サトにそれにみんなは何故私の名を疑問に思うのに…違う人間
つて思わないのかな…）

「ちよこー早くー！！」

（ま、いいわ！）

「うん！！今行く！！」

（…クスクス…それは私の力…日本中の人間どもに…モコンの人々
の苦しみを知つてもらう為…）

「うまくいきましたね…こんなに人間を昔に送りこめるなんて…」

「フフ…これで何もかもうまくいくわ…」

「そうですね」
「…人間がいけないのよ…思い知るといいわ！」
「……………」
「ひみ！」
「何何？クウちゃん！」
「遊ぼう！ひみー！」
「いいわよ！何しようか…？」
「クウね！クウね！追い掛けっこ！」
（元気ね…皆…こないだあんな事あったのに…）
「いいわよ！」
「どうしたの？」
「あ…ああごめんなんでもないわ！」
「そう…！」「それより髪サラサラで長いのねクウってそれに皆男の人だつて…」
「…これが普通だよ！」
「はさみと…か…あ！」
「はさみって…何？」
「あ…ああ別にいいのよ…気にしないで…クウ…」
「ふうんまついつか！」
（だからなんだわ…皆髪が長いのって…どうやら私は…でも何故…）
「ひみ？」
「おーい！クウにヒミ飯だぞ！」
「あ…じいちゃん今行く！ひみ行こう！」
「うん…」「今日も…すまないが…これでいいかね…」
「うん！ありがとう美味しいよ！じいちゃん！」
（本当に嬉しそう…ねクウ…）
「ね！ひみも美味しいでしょう？」
「うん…美味しいわ！」
「さあ！飯は終わりじゃ…そろそろ畑仕事の時間じゃな！」
「私も仕事手伝わわ！」

「それは嬉しいの〜」

「私も…」

（なんだか…だんだん分かってきたわ…）

「……………」

「ライ！」

「やーい！こっちまでおいーで！」「こらこらもっそこまでにしときなさい…」

「うっせいぞ…！！そのガキども…！殺されているのか…！！…！！」
「すみません…ライにこっむこっちに来なさい！」

「分かったよ…お兄ちゃん！」

「…にしても日本は狭いよな…」

「そうね…私達って何をすればいいんだろう」

「そんな事…どーだっていいだろ…マキコ様のいう通りにしときや…な！」

「そうね…」

ガサ…

「誰…？」

「おまえらこんな所で何してんだ…」

「別に…俺ら人間の中に入って過去に行かせたのはいいがその後が暇だね…おまえこそ何してんだよ」

「…ちよつとした遊びをね…」

「そうか…」

「…じゃな」

シュツ！

「カンは楽しそうね…」

「そうだな…俺は別に楽しくなくなたっていいよ…どうせ疲れるだけだし…」

「私も同じだわ！何が楽しくて毎日いるんでしょうね…人間は分か
つたもんじゃないわ…ね…。」

「ハハ…」

「カン……」
「ああ……行くぜ……！」シュツ！
「……どうなされました？マキコ様！」
「カンを……止めて」
「どうなされたので？」
「お願い……早く！」
「分かりました……！皆……行け！」
「大丈夫ですか？」
「私は何でもないわ！それより……」
「おいおい……これからがお楽しみって言つのに……テレポートだお
まえら……」
「ああ……」シュツ
「……」
「……」
「……楽しくなりそうね……皆……頼んだ……わよ……」
「おう」
「……」
「ねえ……私はどうすればいいの……カンの事信じてたのに……」
「仕方ありません……私達がなんとかしてきます！」
「ルミ……ミミ……」
「お願いします……！」
「……いいでしょう貴方達を信じます……」
「はい！」
「……」
「……」
「うわぁー……！！……！！」
「キ……キラ……う……そだろ……？……なんで……モコンだからって……人間が……
人間の命を奪う……なんて……そんな……そんな絶対間違つて……る……
間違つてるんだ……！」
「なんだこの小僧……モコンのくせに大口たた
きおつて……！！」
「モコンだからってなんだ……！！……！！」
「
バツ

「にげ…て…おか…と僕なら…大丈夫だから…」

「…だけどキラ…」

「僕…おかとに出会えて…よかった…よ」

「っ…俺もだ…!!」

(アン…これで一緒になれるね…)

「キラ…!!…!!」 (キラ…は当然だけれど後からは…来てはく
れなかった…俺は…俺は…その場から…キラをおいて…逃げてしま
った…キラじゃなくて俺が…俺が…死ねば…よかったの…に…)

「ん…?」

「よう…」

「…誰…?」

「俺の名はカン…一つお願いがあるんだ耳をかしてきれ…」

「…?」

(わあああああ!!…!)

「心が悲しい時は絶好のチャンスだぜ…これであの女の目はふうじ
れた…」 (よくやったわ…)

「…切られた…わ…これじゃカンが今何処にいるか…分からなくな
ってしまった…私も…探さなきゃ…私一人何もしないのはだめだわ
…私がしっかりやらなくちゃ…」

「マキコ様!! いけません!! たてえどんな未来になるうとも…」

「ジイ…私はマキコ様と呼ばれるほど偉くはないわ…私は普通の女
よ」

「それでもジイは…」

「…ごめんなさい…」

パシ…

「な…何なの?」「それでもジイは貴方様を…ここから出させる事
を、ジイのこの手で止めてさしあげます…」

「ジイ私ここから出…」

「…何を言っても行くというのなら…手段を選びません…」

「ジイ…何…言っ…」

「フ……」

「ラビエス！……！」

「ハハ……そんなお化けでも見たような顔しねえてくださいよ……」

「ジイ……貴方私を騙したのね！……！」

「……………」

「ジイ……？」

「……………」

ビリビリビリ……

「あ……貴方は！……！」 「こいつは新人でな……と、このへんにして

……この女取り押さえとけ！」

「ああ……」

「ジ……ジイは何処……！」

「いるよ……あそこに……ね……でも……」

「ジ……… キヤ……！！！」

「でももう死んでるけどな……ハハ」

「ひ……酷い……」

「あんたがこんな事始めるからだこんな事したって人間はどうにも

ならねえんだよ……ちつとは頭冷やせよな……ま、もう遅いけどよ」「

そんな事……そんな事分らないじゃない……私は……私はこの先の未来

をどうにかして変えてみせるわ！」

「無理だね！！未来は変えられない……」

「変えてみせるわ！！！！例え人間一人一人の心に届かなくたって

……今の日本を見ていたくないんだもの……じつと見てるなんて出来な

い！悲しい心の人はずっと悲しい心のまま……それを、私は変えたい

！！……それって間違ってる事！？人間を助けたいの……私と同じ道へ

は行かせたくないわ……！」 「好きにすれば？」

「え……」

「あ……言つとくけど男は女の涙に弱いとかあんだけど、弱くねえから

そこんとごご注意を……」

「……………私……」

(……かいそうに)

(まきちゃん！)

(私……)

「……私……」

「まだ泣いているんか……」バツ！

「お、おい逃げるな……」 「あんたには……分からないのよ……私の気持ちなんで……私みたいな人々をこの手で……この手で助け出したい……助け出してあげたいから！私は諦めたりしない！」

「そ……まあせいぜい頑張ったら、無駄だろうけどな……！」

「無駄なんかじゃないって事見せてあげるから！」

「……」

「こいつらは殺してもよいと上に言われとるのだ……！モコンが何かしたら俺らは殺す！」

「な……そんなんあつてたまるか……」

「こうむ……！だめだ逃げよう！」

「ここは逃げるべきだ……！早く……」

「モコンが何したってんだ……！」

「行こう……！」

「逃がすか……！」

「走るぞ……！こうむライ……！」 「逃がすか……！」

「うわああああ……！」

「お兄ちゃん……！」

「ライ……こうむ……行け……！早く」

「……やだ……！」

「行くんだ……！」

「……」

「ライ……行こう……！」

「……」

「……」

「……お兄……ちゃん……」

「ライ……」

「シック……なんで……僕らはモコン人だから？モコンはこの町では……下の存在……だから？……シック……お兄ちゃん……が……」

「ライ……」

「……サト……もう……いないのよね……もう」（サトは蝶々を追い掛けていったばかりに天国に行ってしまった……私に蝶々を取ってきてあげるのだと言って……モコンだったばかりに………なんでなの？それだけで殺される……なんて……同じ人間なのに………こんなの………こんなの酷すぎる……）

「ちよこ……思い出してるの？サトの事……？」

「……サトはどうして殺されなくてはいけなかったの……ただ蝶々を追い掛けてただけなのに……まだ小さいのにそれはいけない事……？」
「私達は下の身分だから……上には逆らえない……悲しいけれどもそれが私達の人生だもん……」

「そんな人生私は嫌……」

「それはモコンの人皆が思っている事だよ。けどどうにもならない

……」

「……そう……ね……」

「さ！行こう……」

「……カン聞こえる？」

「ああ……なんだ？……」

「ガルリオについたわ」

「そうか」

「ええ……」

「よくやった……ミミ」

「ミ……ミミ……」

「……どうだ？裏切られた気分は」「……なんで……で……ルミは……？ルミは……」

「さあね……」

「誰も貴方の意見にはそむかないようですね。今映像を見ている人

間もその時はそう感じて忘れる事だつてありうる…こんな事やつても意味のない事だと思わないか？」

「…そうかもしれないわ…でもそれでも私諦めない…たった一つの望みでも変えてみせるわこの先の未来を…」

「何を言つてもだめみたいですね…貴方には…」
「それは貴方達もよ…ラビエス…協力してくれた事はありがたいと思つてるわ…でも貴方は…」

「…その通りすべてはおまえを利用したまで…僕には未来の人間がどうなるうと関係ない…なんで僕達が、人間どもを助けられないといけないのですか？…この残酷な世界を作りあげたのは誰だ？それは、今おまえが助けたがつている人間じゃないか…人間が悪いのに人間が作ったのに何故貴方は助け出したいのか僕には分かりませんね…」
「その中で苦しんでいる人もいるわ…誰も信じられなくなつてる人々が…そして自分は誰からも必要とされない…自分なんていなくたつて誰も気にかけるはずがない…とそんな思いに負けて…自ら死んで行く人々を私は助け出してあげたい人間はとても弱いから…」

「…貴方のように…ですか？」

「……………」

「…ガルリオつてご存知ですか？…忘れるはずがありませんよね…ガルリオは貴方の故郷なのですから…ね…そこに今ミミが行つて調べていますよ…貴方の真実を…ね…貴方が誰にも知られたくない過去ですよ…」

「や…やめて…！！何でそこまでするの…！！！」

「知りたいからです…貴方がそこまで人間を助けたい理由を…ね…」

「貴方には関係ないわ！！ラビエス余計な事しないで…！！！」

「…カン…ミミの所に急げ！」

「ああ…」

「カ…カン…！？」「フ……………」

「カン…なの…？」

「さあね…」

ビュン！

「なんで…皆…分かってくれないの…よ私だけ…」

「それは皆貴方のほうが間違っているかと判断してるからでしょう…」

「間違つてなんてない！！私は…」

「間違つてます…ね！作りあげたのは人間だ…貴方が手をかしてまで助けるほどにも満たない一人一人の人間に届いたつてまた同じ事を繰り返すだけそれなら助ける必要もない…やるだけ無駄つて事だけですよ…クク…」

「そんなの分からないじゃない！！！！！！」

「人間は忘れる生き物ですよ…どうせ頑張った所で無駄足と僕は思いますけどね…」

「忘れたりしないわ！！！！実際に体験した事は頑なに人々の心の中で生き続けるわ！！絶対に！！」

「…」

「ミミ…これ何？」

「日記…よ…ルミ…」

「日記…！？それつて」

「ええあの人のだわ…」

「…これでやっと…」

「分かるわね…すべてが早く皆に知らせなくちゃ」

「そうだね…」

「…その必要はないぜ…」

「シュッ！」

「……………」

「ミミ…その持つてるやつはあの人のか？」

「…誰？」

「おーとすまんすまん…俺だ俺今はこの顔だけどな…カンだよ」

「…驚かせないでよ…」

「それより、その日記あの人のなんだよな…」

「ええ」

「そうか…」

「…今頃ミミが貴方が昔、残した日記を探してるだろう…もう見つけている所かも知れませんか…ね！！」

「…これだから…人間は嫌

い…よ…本当は…私世界で一番人間という生き物が大嫌…い人の事何も考えないで自分の事ばかり…だからこそ…だからこそ私はそういう人間を作らないようにこの残酷な世の中を変えていきたいだけ…」

「多分無理でしょう…人間は手強いですから」

「そんな事私もよく知ってるわ…」

「そうですか…」

「……」

（ずっと私…みかの事友達だと思ってたのに…思ってたのに！！！こんな事なら友達なんていらぬもう何もいらぬずっと一人よ…私なんて消えたって誰一人悲しむ人なんかいないわ…いるわけないのよ！！！）

「どうかされましたか？」「いいえ…何でもないわ…何…でも…」

（ゴミのように扱われていた日々を…誰が分かるというの？こんな死にそんな思い…誰にも分からない…分かるはずがないのよ！！！死にたかった…ずっと死にたくてたまらなかつたわ…でも死んだところで何もならないから私は命つきるまで生きてそして未来の人間に平和をあげるのよ…それしか私には出来ない…）

「うわっ汚い手で触るな！！！」キンコーン

「班にしてくださいーい！！…あれ？ちゃんとくつつけて！！」

「つよし〜」

「うせえな…今からやるさ…」ブツブツ

「あとで…つよし…かわいそうに八八…」

「おいおい…聞こえてるぜ…アハハ」

「……」

「まき…あんな男どもは気にしないほうがいいよ…嫌な事があったらいつでも言ってね！」

「うんありがとうみか」

「私達は友達なんだから当たり前じゃなあーい！」

「うん！」

「みかあゝ帰ろう！」

「あつ！じゃまき明日ね！バイバイ」

「あ…うんバイバイ」

「…ねえもうあんなの構うのやめたら？みか凄く無理してんの分かんだよねえ…みか誰にでも優しい所あるからあんな子構ってるんでしょう？」

「ち…違うよ…！私は…まきの友達だもの…だからだからっ！」

「声が震えてるわよ！みかそんなに無理していたんならあんな子ほっときなさいよ！！一緒にいたらあんたまで虐められてみかまで変な子扱いされるわよ！」

「そ…そうかな」

「うん！帰ろうみか」

「どけそこ邪魔だ！」

「うわっ！こいつ泣いてるぜ！」「え…まさか！ま…まき」

「そのまさかね…たく…気付かなかったわ！本当存在薄い子ねえ…！」

「言い過ぎだよ…！かえで…ま…まき…あ…あの…ね」

「触らないで…！！！！！！私なんて消えたほうがいいんでしょう？皆…皆大嫌い…！！！！！！！」

「まきっ…！！！！！！」(…なんで私だけ…なんでいつも…どの場に行っても私は邪魔者扱い…小学校も…耐えて苦しんできたのに…なんで…なんで…こんなのが毎日のように続くのなら本当に消えてしまいたい。)

「学校行きたくないな」

「アハハ…うそ？」

「本当なんだつてうけるよね！あれで本当に消えたらさあ…」「あれ？噂をすれば…アハハあんた昨日皆の前で消えたほうがいいのか言っただんでしょっ！ドラマの見すぎだよあんた…バツカじゃないの…！！！！！！！」

「バカも程々にしとけよ…！！！！！」

けど！」「私なんか…止める人なんていない…私は一人…もう誰も…いない…のよ…このまま死んで…ママとパパの所に…」

(まきこちゃん！苦しい時辛い時は何でも言いなさいね！ママはまきこちゃんの味方だからいつまでも)

「…なんで…なんで死んじゃうのよ…私をおいて…なんで…二人して…自殺なんかするのよ！！！！！！だから…私は…いつも」

「こいつ親に見捨てられたんだぜ！」

「聞いた聞いた親が借金かかえたって不幸だよね」

「不幸の人と一緒にいると不幸がうつるってテレビで言ってたよ！」

「本当？まきには悪いけど今日から付き合っのやめようかな！」

「えーじゃ私もそうする！！！」

「……。」ガサ…

(いーもん一人でも私一人でも頑張るもん！ママとパパが悲しまないように頑張るんだから！)

「……そう私あの頃何がなんでも何言われても頑張るって決めたんだ…こんな事してたらママとパパが悲しむよね…私…何やってんだろっ…でもどうしよう血が…止めなきゃ…」

(そうよ…私こんなじゃいけないのよ…いつまでもこんなじゃ…変わらなくちゃ！…でも…)

「でも…怖い…明日何て言われるか…」(…でも私負けない…から…頑張るから…だからママとパパだけは…私を見てて…ね)

「……」

(私が誰も信じられなくなった昔…一番に信じていた友達…もう帰ってこない親…私の心の支えは、もう何もかも消えてしまった…私みたいに誰もならないようにしなくちゃ！！また人間達は弱い者を傷つけ…そして周りの人間はそれを見て笑う…そして皆信じられなくなっていくうちに人間という者が嫌になり自殺をして命を落とす…)

「ようやく来たようだ…カン遅かったじゃないか…」

「すまん…ラビエスこれ読んでたらちつと長くなっちまってさ…！」

「その日記は！……！」

「ああ……この日記？……あなたのさ」

「読んだって本当なの……！」

「………」

「あなたの過去全部知っちゃったぜ……！！ミミモルミモな……！」

「なん……で……」「あなたが人間を助けたいと思ってるからさ……あいつらは汚い心のままだ……！弱い者を見つけ自分の欲のまま虐めその虐められた者もまた腹いせにまた弱い者を虐めそうやってしか生きられない人間どもなど変えられるとでも思っているのか？……あなたも嫌いならほつとけばいい……」

「貴方達の言ってる事は、たしかにあってるけど……なんでそこまで……」

「……まだ分からない？私達が人間を嫌う理由……」

「俺らはあると同じ苦しみをあじわってきた……」

「え………」

「私は貴方が分からない……！！人間を助けたい？？バカ言わないで！貴方だって人間に酷い事されてきたんでしょ？毎日毎日泣いて過ごしてたんでしょ！毎日苦しかったんでしょ？なんで……そんな思いをしていながら貴方は人間をそんなに助けたいのよ！私には理解できないわ……！」

「……私にも……分からないわ……」

「……っ……」「私にも……分からないのよ……でも人間が変わらないとこの世界はだめになってしまふ……人の闇が渦巻いてこの世界はだめになるから……私は……」

「バカ言わないで……！！人間なんて私は信じない……！！……！！……駄目になる？別にいいじゃない……それを望んでやってる事でしょう？……違う？何が違うって言うの？」

「犯罪だってそうだ……何年たっても人が人を殺す事が終わらないのは、駄目になるのを望んでいるからだ……汚れてもいい、汚れていても何も感じないそんな人間がうようよいるんだ……！！何年たったっ

て差別は人の闇につつまれて消えちゃあいない…何故だか分かるか？ひそかに残酷な世界を望んでいるからだ！！！！そんな人間どもを闇から救えるとも思っているのか！！！！！！！！！！」「わ…分からないのよ！！私にだって分からないのよ…そりや憎いわよ！私だつて…私だつて…でも同じ過ちはしてほしくないもの！！！！今の人間みたいには…させたくないもなかつたんだもの！もう！！人間が苦しむのもみたくない…人が人を殺すのも見ていたくないわ！！人が一人亡くなるたび恐ろしくて…恐ろしくて嫌なのよ…！！！！！！この世界はこの先どうなるんだろうってこのまま汚れていくなんて私は嫌！！この世界を日本を犯罪や差別で渦巻いてるようなそんな世界にはしたくない…！！！！！！！！！！」

「じゃどうするてんだよ！！！！皆おめえみてえな考えにならなかつたら過去に行っても同じだつたら！！過去にいつてモコンの苦しみを知ったとしてもだ…そんな簡単には変えらんねえんだよ！！！！俺は間違っちゃあいねえ！！！！！！間違つた事は言つてねえ！！！！！！！！！！」

「確かにそう…ね…貴方達のほうが正しいわ…私だつてそう思つた…自分勝手に人が人を苦しめる事しか出来なくて…」

「そいつあちげえな！」

「誰？！！！！」

「俺か…俺は…こうむ…下松こうむだ…未来からきた…な」

「み…未来からつて…！？そ…んな事が…」

「…俺ら人間はあんた達が言ってる通りかもしれない…だがあんた達の言い分がすべて正しいわけでもない…人間は確かに差別で人を殺す事もある…罪もない人を巻き込んで悪さをするがすべての人間がそうとは、限らないぜ…俺だつて自殺をしたくなるぐらいこの世を嫌になる時はあつたさ、けどなここで負けたりしたら一生の笑いもんだ！！！！差別がどうした…そんなに嫌ならそれに負けないくらい強い心をもちゃあいいだけの事だ。」

「……………」

「俺の言ってる事分かるか…？つまりはこういう事だ…過去から出たあと一時期は争いもなく平和な日本だったんだ…けれどつい最近また犯罪や差別で自殺する人が増えてしまった…申し訳ないと思っ
ている…すまん…」

「ほおーら言わんこつちやないわね！時間の無駄だったって事よ！
！…！」

「無駄ではない…」

「じゃ何よ！！！！実際に過去に行つて体験しても争いはまだ続いてるなんてバカげてるわ！！信じるほうがどうかしてんのよ！！！！
！！あんただつてこれでもう分かったでしょう！？人間に教えても無駄だつて事がね！！！！！」

「…こつむそれは真実なのですか…？」

「あ…ああ…貴方に申し訳ないと思ひ俺は未来から来たんだ…」

「そう…私のやってる事はすべて無駄になつてしまつたんですね…」

「…俺がなんとかしてみます！！貴方のやってる事がすべて無駄とは限りません…まだあの頃の記憶があると俺は信じたい…！」

「ありがとう…こつむ」

「…は…？お…おかと！？どうしておめえがこんな所に……どうしてだ…！！…なんで人間の破滅を望んでる奴らの味方なんか…！」

(カン…)

(面白い事思いついた)

「人間の破滅を望んで何が悪い俺は昔から人間なんて大嫌いなんだからよ！」

「なんだと…」「人間なんて最初から信じちゃあいねえし…！！！」

！おまえみたいな人間を見るとムカムカするぜ…！」

「…じゃひみの事はどうだつていうんだ？あれは嘘だったのか！？好きつて言つたのも！俺が他の女とお茶飲んでた時ひみに変わつて怒鳴つたのも！あれも全部遊びだったのか…？」

「ああそうさ…ぜえーんぶ嘘だ！」

「何故だ…何故そんな事をした…」

「……」 「おまえは…人の気持ちをもて遊ぶような奴じゃないはずだ…俺は信じる…!!おかと…」

「信じる…?…何言っただよ笑っちゃまうぜ…俺の事すべて知ってる言い方しやがってよ…何も分かってないくせにおめえみたいなやつ見てると非常にムカムカしてくるんだよ!!」 「…確かに俺はおまえのすべては分からねえ…おめえがこんなふうにししか俺達を見ていなかったなんて知りもしなかった…だけど…だけど俺はおまえの事を親友だと…」 (……ツ……)

「親友?バカ言っただよねえよ…友達なんてな…仲良くしてたって心の中では何考えてるか分かんねえんだ…俺はそういう経験何度もしてきたんだ…口でも何でも言えるでも実際は逆かもしれないねえんだぜ!!…!!だから俺は誰も信じらんねえんだ!!…!!…!!」

「おかと…」 (…泣いてるわ…!?これは泣きまね…いいえ違うわ…これはカンが苦しんできた過去…おかとという人物になりすまはずが…自分の過去を思い出してしまったようね…)

「…おかとごめん…俺おまえがそんなに苦しんできてたなんてずっと一緒にいたのに気付かなかった…だけど俺おかとの事は親友だと本当に思ってる…嘘じゃない!!…!!信じてくれ…」

「…それが本当に嘘じゃないならさ…証拠をみせる」 「しよ…証拠って!?!」

「証拠がないなら…死ぬ…!!…!!」

「やめなさい…!!…!!こんな事して何になるの…!!…!!」

「うるせい…!!…!!おまえらに何が分かる…!!…!!俺の苦しみや憎しみ苛立ち恨みそんなが入り交じったこの心を誰が分かりやがるってんだ…!!…!!誰一人分からねえ分かるのは自分だけだ…人が悩んでる時だつて人事みてえに笑いやがってよ…人をバカにした目で見やがって…!!…!!どつかのバカが面白がつて人に言いまわつてたちまち噂になって広まってよお…内緒にしるって言ったのにおかげで笑い物になっちゃまった…人間なぞ信用なんかしたらいいねえん

だ！！！！！！！人間なんて！！！！！！！！」

（…暴走してきてるわ…自分の気持ち…に…おかとうという人物になつてる事も忘れてしまつて…今までよほど辛い思いしてこの世を生きてきたのね…）

「…俺らを憎まずにいられないなら憎まれたつて別にいい…おかとうがそうしたいならそれでいい俺は何も言わない…でも俺達人間は…いい人ばかりじゃ面白くねえぜ…確かに嫌な奴も山ほどいるが…それでいんじゃないのか？いつまでも甘つたれるんじゃないやねえよ！！」

「甘える…だと…」

「そうだおまえは甘えてるんだ！！！！！！何もかも世間のせいにして…そういうのを根性無しつてんだよ！！！！！！嫌ならだ…自分がまず変わるべきじゃねえのか？」

「……………」スー

「お…おまえは…！？」

「もどつてしまいましたね…せつかくおかとうという人物になりすましてたのに、なれない事するから…」

「おかと！！！！！！お…おい大丈夫か？」

「……………」

「…おまえの親友は…俺が乗り移つた時点で…死んでいた…」

「な…んだつて…」

「そのままの通りだ…」
「…おか…とは過去に行ったせいで運悪く死んだと思つてた…ひみもそう思つて泣いていた…なのに…なのに…こんなんで死んでただなんて…おかとを何故殺した！！！！！！何故おかとなんだ！！！！！！！！！！」

「そんなの俺にも分かんねえ…偶然見つけてな…」

「偶然…だと…人の命をなんだと思つて…なんだと思つてやがるんだ！！！！！！おかとを返せ…返せ！」

「……………」
「こんな…事つて…おかと…おかと…こいつの人生つてなんだつたんだ…こんなんに…巻き込まれちまうなんて…」

「こつむ…」

「ちつくしょう！！！！なんで…なんでおかとが死ななきゃいけないんだ…俺は…俺は！！！！おかとに悪い面ばかり見せてきた…人と話したりいろいろするのが苦手でいつもクールな自分を演じ続けてた…それでもあいつは俺を友達だと言ってくれたんだ…なのに…なのに！！！！！！その御礼も言えないままなんて…くそ」

「こうむちゃん…」

「ひみ…何でここに…」

「…心配で見に来たの」

「……」

「…こんな身勝手な人達の為に死んだのね…おかとだけは、優しくつたわ…私が悲しい時いつも傍にいてくれた…私の事初めて好きになっってくれたわ…好きって初めて男の人に言われた…あの時のおかと今でも忘れられない…私まだ返事してないのに好きですって…今頃後悔したつてもう遅いの…ね…」

「……」 「本当に悲しい時って…涙も出ないくらい悲しいのね…」

「私は…平和を広げるのではなく悲しみを…広げてしまった…私が平和な世界をなどと考えなければ…考えなければ…その男の命は奪われずにすんだ…私が悪いんだ…私が…私が！！」

「一人死んで要約わかったようだな…自分が間違っているのを」

「…ラビエス」 「…貴方は間違ってない…よ…この世界がいけないんだ…本当は皆貴方のような考え方をもっているんだ…けれど分かっていながらそれを換えようとはしないだけ…テレビや新聞なんかで頑張つてこの世界を換えようとしている人たちもいるが…な…でも結局みんな一人一人が協力しなきゃ意味がないんだ…それを一人で頑張ってるすごいと俺は思うぜ…」

「でもこの男は死んだ…私が殺した事に変わりはない！！！！！！」

「…生きてるよ…俺やひみの心の中で…な…」

「あらあらくつさいセリフだわね！！！！！！！！」

「……」

「私達の事無視していい度胸ね…！貴方だって本当は大事な彼を殺

されて憎んでるくせにね…そうでしょう？そうだとしたらあの女を憎むべきね…私だったら呪い殺すわ…ね！フフ…」

「おかとを失った事はとても悲しい…けれど彼はそんな事望んでなんかいないわ」「そうかしら…望んでいると思うわ…もつと生きたかったでしょうね！そして貴方との未来を望んでたと思うわ…でもこの女のせいでその望みまでもが失われたんだもの、ね！憎いでしょ…？」

「……………」

「答えられない？でも貴方の心の中ではそう思っているはずよ！外には出さなくても、ね…愛する人を失うそれほど苦しい事はないわ…だってそうでしょう？もう会えないしもう話せない…それに悲しい時傍にもいてくれないわ…命は一つだもの、ね。」

「ひみ…おいおまえどういうつもりだ！！！！ひみがそんな事考えてるわけねえだろうが…」

「あら？そうかしら…分からないわよ…心の中は読めないもの！」「…確かに私は過去から現在にきておかとがない事で貴方を恨んだ事はある…わ…おかとをこんなふうにしたのは貴方のせいだ…ずっと思ってた…でも違う貴方のせいなんかじゃない…この世がおかとをこんな目にさせてしまったのよ…そう分かったから！」

「な…によ！！！！正直に言ったらどうなのよ…はつきりと言ったらどうなのよ…そうやって言いたい事言わないで無理してなんになんのよ！！！！」「あの人はもどつて来ないわ！！！！今さらその人に怒鳴り散らしても、もうなんにもならない！！！！なんにも変わりはないわ！！！！あの世に行ったのよ…あの人は今でもまだ近くにいますよ！だわ！！！！ひみ…また呼んでくれる気がしてしま…でももういないのよ！！！！もう会えないのよ！もう声も聞けないのよ…悔しかった…好きって気付いたのはそれから随分たった時だったもの…人…って不思議ね！失ってから気付くんだもの…！！！！！！！！！！」

「……………」

「ひ……」

「もうやめましょう……こんな事いつまで言っただけできりが無い事です。こんな事で揉めても彼はいないんですからね……フフ」

「……ラビエス……」

「そんな事よりも……気になる事が一つ……何故この者達は現実の世界にもどってこれたのですかね……」

「俺達が勝ったから？」

「多分違いますね……」

「……ラビエスは知っているのか？」

「いいえ……でもそれは……」「あ……あ……私……」

「どうしたんだ!？」

（人間の心は二つある）

「いきなりどうしたんだ？お、おい!」

（それは……悪い心と善の心……彼女の場合は人間を守りたい助けだしたいという思い、人間なんか嫌いだ助けたって同じだという思い……善の心が今まさに悪となった……きつと今頃……）

「何処に行ったの……あの人……?」

「……あんた達は、元の世界に帰ったほうがいい……」

「でも……」

「帰りなさい……ここにいる必要はもうない」「一つ教えてください……貴方は何故人間を嫌うのでしょうか？過去になんか」

「フフ……過去の事を話すのは好きじゃないよ……思い出してまた苦しくなるだけだからね……人には、いろんな過去があるんだ」

「すみません……」

「……ごうむちゃん……」

「あ……ああ行こうか……」

「ま、待って……少しだけ……少しだけおかとを見つめさせて……」

「……」「……」「おかとをこの目で焼き付けたいの……もう二度と写真でしか……写真だけでしか見れないもの……」「ひみ……」

「……」

（人の心ってこんな一瞬で…変わるんだな…最初の頃は俺しか見てなかったのに、今は…もうひみは俺を見てはいない…）

「……」

「行ったか…」

「ラビエス？あいつはいつたい何処行ったんだよ！知ってんだろ？」

「Wテイルームだ。」

「え？それって…もしかして…」

「ああ！そつだ…」

「過去に行った人間を現実に戻してるって事？」「そつだ…善の心が悪の心になった…だから今人間を元の世界に戻しているのだよ…」

「そつか…そつだとしたらあの人達がここに来たのもつじつまがあつ」

「フフ…人間ってのは実に不思議な生き物だな…どつちにもなれるんだ。思いが強いほうにな…彼女は心の何処かで人間の愚かしみを感じる所を一生懸命に押し殺していたのだろう…そして自分に言い聞かせていた…彼女は彼女なりに心の中で戦っていたのだろう…」

「………」「…あの子は私と一緒にたわ…」

「え？あの子って…？」

「ひみつて子よ…私も大好きだった人が死んだの…いいえ殺されたつて言つてもいいわね…だって彼は、酷い差別によつて10年という短い人生を閉じたのだからね…亡くした理由は違うけれど、大切な人を亡くした悲しみは同じだわ…言つたでしょう？あの時私だったら呪い殺すつてその差別で彼を死まで追いやつた人達を私は殺したわ…呪い殺すように…ね」

「………」

「昔も今も差別というものは変わつてない…変えられないようになつてるのかもしれない…」

「…そつだな」

「これで、よかつたのよね…？」

「ああ…俺達は間違つちやいねえ…」

「そうね…」

「…俺達これからどうする…？もうすべて終わったけれど…」

「さあ…でも僕達は人を憎み続けながら生きるのだろう…孤独にな…。」

「こうむちゃん…？」

「…あいつら…人間が嫌いって言ってたな…」

「そうね…」

「悲しい…事だな…」

「…一度傷つけられた人間に…人間を愛せって言っても無駄な事よ…一度傷つけられた人間は…元にもどすのが難しいのよ…人間を怖がっているから…」

「…それよりひみ…」

「ん？」

「おか…おかとの事今でもす…好きか？」

「…うん…大好きよ…」

「俺…よりか…？」

「え…」

「俺より好きか…？」

「…」

「好きでもいい…おかとを忘れなくてもいい…いいから俺を…俺を見てくれ！ひみ…」

「…こうむちゃん…」

「今さらこんな言葉聞きたくないよな…ごめん…あの頃の俺ってさ、なんつつかガキだったんだ…おまえの気持ちも考えてやれなくて…ひみを傷つけてばかりいた…格好悪いよな…こんな男…おかとのほうがまだましだ！俺は悲しい時傍にもいなかったわけだし…本当俺って…え？ひみ！？？何ない…て…」

「…やっと…言ってくれ…た…」

「え…？」「…いつ言ってくれるんだろうってずっと思ってた…もちろんおかとの事は好きよ…でもこうむちゃんの事も好き…私我が

儘ね……」

「……俺だって……我が儘だった……ひみの事好きなのに木村さんと一緒に帰ったりお茶したりしてた……」

「でもあれは！……！！」

「あれは俺だった……俺自身の行動だったんだよ……」

「全部仕組まれてた事でもそうしたのは全部自分なのかもしれないわね……。」「でも気になるのは俺のもう一人が言った言葉……あれは……」

「人に言われてそのまま成長する……か……私が思うに、それはあれよ……実は出来る子なのにまわりから出来ないと言われて育ってしまつて本当は何でもできるのにその言葉に負けて出来ないと思ひ込む事で嘘の自分を作ってしまう……って言いたかったんじゃないかな……？ こうむに取り付いてた人は……いえもう一人のこうむは……」

「そうかもな……。」「私達は少し考えなくてはいけないのかもしれないわ……過去からのメッセージを簡単に聞き流す人がいるから今の人間達は簡単に人の嫌がる事をしたり傷つけてしまふんでしょうね……同じ人間なのに……ね……」

「……俺達で変えていかなきゃな……この世界を……」

「ええ……。」「」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9105d/>

w

2010年10月8日15時50分発行